

本報告は、大正-昭和初期の政治演説の特徴について、演説を活字化した演説集、演説のあり方を論じた演説論、そして演説を録音した演説レコードなどのさまざまな資料を、その特質に即した方法で分析することで、考察を行うものである。

演説は、明治初期に福沢諭吉らによって日本に導入され、自由民権運動の展開にともない全国に普及し、明治中期には各地で演説会が開催されるようになるなど、青年層を中心に演説ブームが起こったが、国会開設による政治目標の達成、そして、1900年に治安警察法が公布されると、演説は次第に衰退していった。その後、日露戦争を経て、新たな段階に入った日本のあり方が模索されるようになると、その表現手段を演説に求める雑誌『雄弁』が創刊され(1910年)、また、学生の雄弁会が活発になるなど、演説復興の気運が高まった。この時期の演説は、「雄弁」と呼ばれ、明治期の演説とはその内容や身振りだけでなく、実践のあり方そのものが異なっている。ここでは、まず演説についての資料の特徴とその分析方法を提示し、次に、大正-昭和初期の演説を象徴する人物の一人である永井柳太郎の演説をめぐる諸問題を取り上げ、この時期の政治演説の特徴を具体的に示すことにする。

演説は、それが行われた際の文脈および場所・空間性に規定される一回性のものであり、演説者の表情や身振り、聴衆の反応など、完全に再現することは不可能であるという特徴を持つ。また、その内容については、表現の誇張や省略が頻繁に起こり、純粋な政治思想や理念を論じる思想史的なアプローチではその特質を十分理解することはできない。つまり、演説を分析する際には、演説者の理念がどのように表現され、聴衆に受容され、理解されていったかの過程の総体に着目することが必要となる。そのような視点から、論じる対象(普選論など)を聴衆に説明する論理展開やレトリック、拍手や野次、演説評を分析することで、社会の意識や価値観、すなわち社会史的・政治文化史的問題を考察することが可能となるのである。演説を分析する資料としては、書籍(演説集・演説論)、演説や演説評を掲載した雑誌・新聞記事、演説レコード、手書きの演説草稿や映像資料などが挙げられる。これらの文字資料・非文字資料(写真、図版、映像)を、それぞれの特徴、組み合わせられ方、各メディア(書籍、雑誌・新聞、レコード)の特徴に即して分析することが重要である。以下、大正-昭和初期に演説の第一人者とされた永井柳太郎(1881-1944年)の演説について具体的な分析を行う。

永井は、大正デモクラットの旗手の一人として活躍し、評論活動を展開する中、政治家に転身、やがて翼賛運動に積極的に関与したことから、「転向」と評される人物である。永井の特徴は、表現手段として、演説を非常に重視したことである。永井は、中野正剛らと並び、「最高の雄弁家」と評されることが多い。永井の演説の特徴は、尾崎らが論理型とされるのに対し、永井の演説はしばしば美辞麗句型で内容や論理より、レトリック重視型であることが指摘されている。選挙戦の新聞報道や雑誌での演説評を分析するとその点が強調されているように思われるが、演説集や演説レコードを分析すると、永井の演説は、基本理念(国内外の平等原則の貫徹)をベースに、状況に応じて主題が設定、事例や修辞が加味されていく構造を持ち、簡潔で明確なことが特徴で、声量の大きさや力強い話し方から、当時の人々に期待された雄弁のイメージに合致し、「雄弁家」としての評価が確立していったことがわかる。また、演説論の分析からは、単に国粋右翼的な主張に転向したのではなく、基本的な論理はそのまま、帝国主義、共産主義など近代イデオロギーを超克するために古今東西の多様な事例を融合させ、いわば、「モダニズムとファシズムの結合」したような表現で主張を展開していったことがわかる。以上が、永井に代表される大正-昭和初期の演説の特徴であり、演説という表現形式を重視したことが、永井らをそのような方向に導いていった要因の一つであったと思われる。